

『言語文化学』への試み（1）」を読む

田 籠 博

0 はじめに

本稿は本紀要第6号所載の『言語文化学』への試み（1）——「気」表現の分析を糸口にして——」に対する論評である。その論考は、

様々な形式によって表出された言語表現をつぶさに吟味することによって、人間の営みの集積である文化の諸相を浮き彫りにする（112-17）という「言語観」（112-19）に基づいて著されたもので、

0. はじめに I. 言語と文化 II. 「気」とは何か
III. 「気」の複合述語表現と外国語 IV. おわりに

の5章から成る。以下、これを「試論」、各執筆者を「著者」と呼ぶ。

第I部ではI章を逐次本文を引用しつつ読む。第II部はII章の前半部を対象とし、第III部ではIII章の方法上の問題点を検討する。

論評対象を言語に関わる問題に絞ろうとするが、時に一般論に傾いた記述を含むことがある。論評と称する所以である。なお、引用文の所在はその最初の頁数、行数（1頁32行換算）とする。

第I部

1

試論は次のように書き出される。

欧米人は、日本人が“yes,no”の返事をはっきりせず¹⁾、結果として嘘をつかれた、だまされたという印象をもつことがあるようだ。

(113-19)

1) 米国人ロビン・ギル氏は『英語はこんなにニッポン語』（ちくま文庫 1989）で日本人 Yoko Ono 氏の証言を紹介している。

私が日本で大学生だった頃、「アメリカ人というのは、どんな時でもイエスとノーをはっきり言う。その点を学ばなくてはいけない」と先生に教えられました。ところが、実際に長い間外国で暮らしてみると、全然そんなことはなくて、人間ってみんな同じなんですよ。（104p）

所が、以下では日本人の“yes,no”の問題が論じられるのではなく、日本語「嘘」の意味へ話は転じる。従って、実質的な書き出しは次である。

フランス人に日本語を教えるとき、日本語の「嘘」という言葉の用法がかれらにとっては存外難しいことに気がつく。(113-20)

意外な事実だが、事例がないため「嘘」のどの用法かは不明。次で諺「嘘は泥棒のはじまり」は「すぐ理解できる」と言うから、「存外難しい」の意図が測りがたい。

次の部分には問題が多い。文ごとに番号を付す。

①「嘘は泥棒のはじまり。“Le mensonge est le père du vol.”」などは、悪魔の別称を“esprit du mensonge”というだけのことはあって、「嘘をつく“mentir”」ことは「人をだます意図をもって、真実とは違うことを故意に強調すること」であるから、かれらにはすぐ理解できる諺である。②しかし、日本語の「嘘」には「だます」という語感が希薄なようだ。③『広辞苑』では、「嘘字」は「正しくない字」のことであり、「今やめるのは嘘だ。」は「今やめるのは適切でない」ほどの意味であり、「人は嘘にて暮らす世に(『閑吟集])」となると、どうも昔から日本は「真実を言っては暮らせない社会」になっているらしい。(113-22)

①は二つの挿入部と前後との関係が分かりにくい。名詞“mensonge”の説明に動詞“mentir”が引かれるのも不可解である。語釈を注意深く読めば、「嘘」が「真実とは違うこと」に該当し、「人をだます意図をもって～故意に強調すること」が動詞句「嘘をつく」で始めて生じる意と分かるから②「しかし」は不要。「だます」という付加的意味(「語感」に非ず)が“mentir”から誤類推された結果だからである²⁾。また、③で『広辞苑』の例文をparaphraseした

「今やめるのは嘘だ。」は「今やめるのは適切でない」ほどの意味には疑問がある。『新明解国語辞典』第三版にも類例があるが、筆者は無条件には了解できない。これが適格文であるためには、「～のは」が条件節となって「やめたら、やめれば」となる必要があるが、筆者の語感では例文の

2) ここから、フランス語が「言葉をもって欺く」を“mentir”一語で表現するのに対して、日本語は「うそをつく」と語の複合で表すという言語的相違が見出せる。なお、フランスの諺に“le père”とあるが、日本では「必要は発明の母」と「母」を用いる。これこそ文化的問題であろう。

「～のは」をそう解することは困難だし、著者も同様に見える。

問題は次の推論である。

「人は嘘にて暮らす世に（『閑吟集』）」となると、どうも昔から日本は
「真実を言っては暮らせない社会」になっているらしい。

16世紀初に成った歌謡集『閑吟集』には多くの恋歌の他、有名な

55 何せうぞ くすんで 一期は夢よ たゞ狂へ

のように中世的情念を発露させたものがある。例文は春部17番の小歌の一部である。前後とともに示す。

16 人の姿は花鞆、優しさうで 負ふたりや頼の皮鞆

17 人は嘘にて暮らす世に なんぞよ燕子が実相を談じ顔なる

18 花の都の経緯に 知らぬ道をも問へば迷はず 恋路 など通ひ馴
れても紛ふらん

『新日本古典文学大系』56によれば、17番は禅宗の語録の一句「燕子梁間談実相」（南窓国師語録・下）に拠り、「うそ」と「実相」という言葉の対比に面白みがある。配列から見て、17番も恋の行方の頼りなさを嘆じ、恋人の言葉を口先だけの「うそ」と感じつつ、さりとて信じたい気持ちも捨てきれない人物（女性か）の歌と思われる。男女の仲には「うそ」がつきものなのに、なにさ、さも世間の「実相」を看破したかのような顔つきで、梁の上から私を見下ろすとは小面憎いことよ、と燕にあたった歌である。「世」には、「社会、世間」のみならず「男女の仲」の限定的な意もある。恋の駆け引きに「うそ（嘘）」³⁾が介在するのは、古今東西、不変の事実であろう⁴⁾。

仮に恋歌でなく、「世」が「社会、世間」の意だったとしても違いはない。中世歌謡の一句を根拠にして、以後五百年に及ぶ日本社会についてどのような言及が可能かを思えばよい。「どうも昔から」には「今まで」の含みがあるが、現代日本が「真実を言っては暮らせない社会」だろうか。

3) 「うそ」は、『温故知新書』に「迂疎 虚言」と表記するように、室町時代にはまだ「嘘」字の定訓となっていない。『日葡辞書』に「うそ、嘘をつく、嘘を言ふ」「嘘言ひ、嘘つき」が見え、『時代別国語大辞典 室町時代編』に抄物の例が多く載る（例：ウソヲ云テタラスゾ。＜杜詩抄十二＞、タラスは「欺く。」）が、他のキリシタン資料に見えないから、まだ俗語的な色彩が濃かったのであろう。

4) 早く『古今和歌集』卷十四恋部（仮名序に重出）に次の歌がある。

712 いつはりのなき世なりせば いかばかり人の言の葉嬉しからまし

『新大系』は「嘘のない二人の仲ならば」と解する。

欧米でも「嘘も方便」に類するものはあるが、この「嘘」は「罪穢れのない嘘 “mensonge innocent”」のことであり、日本人のように「嘘にて暮らす」習慣はない。(113-32~114-2)

挿入部は日本語の「嘘」が「罪穢れのある嘘」だと匂わせる意図か。『嘘にて暮らす』習慣はない」と言うが、その「日本人」は実在したとしても五百年も以前の人々である。社会の偽善性を暴いた文学作品が欧米に多くあることを知る読者は、これを文字通りに受け取ることができない。

イギリスなどでは、今でも、口約束こそが紳士の最高の保証であるという。日本は嘘について寛大な社会であるらしい。いや、むしろ、嘘こそが人間関係の潤滑油になっているのかも知れない。(114-2~5)

「～という。～らしい。～かも知れない。」と推測文を重ね、事実と反する(事実だと立証されていない)内容を展開する論法には従えない。なお、イギリス紳士の「口約束」は「口頭による誓約」の誤りであろう。

2

第二パラグラフでは、試論の主題たる言語と文化との関わりが扱われる。

日本語とインドヨーロッパ語族に属する英語、ドイツ語、フランス語とを比較してみると、その文法的相違にはじまって、文化——とくに風俗や心性(メンタリティー)——の違いからくる表現態様の相違が目につく。(114-6)

「目につく」はずの「表現態様の相違」の事例は提示されない。日本語をどの言語と比べても、文化の違いに起因する表現上の相違は必ず見出せようから、ことは「インドヨーロッパ語族」所属言語との「比較」に限らない。三言語は確かに「インドヨーロッパ語族」(正しくは「インド・ヨーロッパ語族」)。この表記には重要な意味がある。)に属するが、英語・ドイツ語とフランス語とは親縁関係が近いとは言えず、この pedantic な知識は有効ではない。なお、「比較する」は言語学では限定的な意味で使用されるから、「対照する」或いは単に「比べる」と言うべきである。

次は主述が錯綜した長文のため、節ごとに数字を付す。

①あらゆる言語がその属する文化的状況と必然的に関わりをもち、②ニワトリとタマゴの譬えではないが、③言語が文化を表現し文化が言語を規定するというだけでなく、④今日のように異文化間の交流が活性化し、

メディアが開発されると、⑤時には言語が文化を先取りすることにより文化を規定することもあることから、⑥一体どちらを優先的な決定要因ととらえるべきか困難なほど、⑦言語活動の文化形成に与える役割には計り知れないものがある。(114-8)

一読して了解できるかという観点から、②は贅言、③は意味不明。④はひとまず措くが、⑤との繋がりが不明。⑤「言語が文化を先取り」及び「文化を規定する」も③と同じく意味不明。⑥は問題設定の必然性がなく、⑦は「言語活動の」が主格・連体格のいずれか不明で「与える」の意味が取れず、従って「文化形成」との関係が分からない。

内容的には、①は「あらゆる言語」「必然的」と一般的に述べるだけであり⁵⁾、⑦もまた「宣言」の類で具体性がない。そもそもこの種の言明は「言語文化学」的研究が一定の成果を得て始めて可能なのではないか。

⑤の例らしく、次の事例が示されている。

①卑近な例ではあるが、あるお笑いタレントが「赤信号みんなで渡ればこわくない。」と言ったとき、②そこには日本の伝統的な集団民主主義が凝縮されていたのに対し、③また別に「カラスなぜ泣くの、カラスの勝手でしょう。」⁶⁾が登場したとき、④ここに不幸にも無責任個人主義の跳梁跋扈が予告されていたのである。⑤コピー・ライターとかコント、お笑いの文化コメントとでも言える言説は、⑥生活言語というよりメタ言語に近いものであるが、⑦それだけに文化の本質を看破していることがある。⑧さて、われわれは日本語と外国語の相違を分析することによって、言語の比較と文化の比較が同時併行的に可能になるのではないかと考える。

まず、⑤の並列関係が不明。「お笑いの～言説」は「お笑いの（世界で行われる）『文化コメント』とでも言える言説」の意と解するが、「文化コメント」が分からない。①③の例を「コメント」と呼ぶのは適切でない。ともあれ、②「凝縮」④「予告」したというこれらの事例から、「言語が文化を先

5) ①が一般的かどうかは議論の余地がある。Pidgins, Creoles に関する社会言語学の成果を見ても、証論ずみというまでには至っていない。

6) 二つの例文は正しくは「赤信号、みんなで渡ればこわくない。」「カラス、なぜ泣くの。カラスの勝手でしょう。」と表記すべきである。原文では第二例の発話者、あるいは発話の立場が転換している事実が反映されない。

取りすることにより文化を規定する」ことになるだろうか。②「日本の伝統的集団民主主義」、④「無責任個人主義の跳梁跋扈」の是非は吟味しない。

所で、⑥「生活言語というよりメタ言語に近い」と言う時の、「メタ言語」とは何か。

メタ言語 英 metalanguage, 仏 metalangue, 独 Metasprache
言語を分析・記述するために用いられる、より高次の言語をいう。

(略)メタ言語によって分析・記述の対象となる言語を対象言語という。すなわち、対象言語は現実界の事象を対象とする(日常的に用いられる)言語であり、他方、メタ言語は言語表現そのものを対象とする言語である。
(『言語学大辞典』)

まことに pedantic な「メタ言語に近い」も、つまりは誤用にすぎない⁷⁾。従って、⑦の言明も意味をなさない。

パラグラフ末尾の文が⑧のように「さて」で始まる例は論文では稀である。次文が「たとえば」だから、単なる誤りと見て次で取り上げる。

3

次のパラグラフの冒頭はこうなる。

⑧さて、われわれは日本語と外国語の相違を分析することによって、言語の比較と文化の比較が同時併行的に可能になるのではないかと考える。

たとえば、日本語を英・独・仏の三言語と比較するとき、日本語理解の難関としてあげられるもののなかに必ず「助詞」があげられる。

(114-21)

これで「たとえば」が意味をもつ。⑧は試論のみならず「言語文化学」を構想する共同研究の動機と期待を表明するものだから、前パラグラフの末尾に置くのは適当でない。

⑧は論評しない。「日本語と外国語の相違」にどれほどの事実が含まれるか、言語比較と文化比較とを「同時併行的」に行うにはどれほどの慎重さが

7) 著者の意図は、広告コピーやタレントの「言説」に由来する流行語(表現)が、しばしば時代の風俗や思潮を象徴的に反映すること、もしくは、新しい風潮を創り出すことにあったかと思われる。仮に後者だとしても、それを指して「言語が文化を規定する」例と言えるかどうかは疑問である。

必要かを考えるばかりである。

助詞は日本語話者ですら「が・は」や「から・ので」「に・へ」の使い分けに戸惑うことがあるから、「三言語と比較する」ことに格別の意味はない。従って、上に続いて「日本語の助詞は」(114-24)以下、助詞のニュアンスまで外国人が理解するのは容易でないという常識的内容を、不十分な例示とともに饒舌に述べる必要があるのだろうか。

次のパラグラフを見よう。

英・独・仏の三言語の側から言えば、主語と述語の連結形態は厳密なまでに緊密で、その文法関係が重視され、主語の人称や(性)数により動詞が変化し、通常両者は文頭におかれ、会話にあっても省略することは不可能である。(115-4)

この文の主語は何か、の例題に使えそうな所謂「悪文」である。主語と述語との「連結形態」とは何か。「厳密なまでに緊密で」という奇妙な認識の根拠は何か。「文法関係が重視され」とは何を指すのか。疑問は次々に湧く。実際には、「主語の人称や(性)数により動詞が変化」という周知の事実を言うにすぎず、誇張の過ぎた表現である。

例えば英語における主語・述語の関係を「連結形態」と呼ぶことを筆者は知らない。「述語」は述語動詞とすべく、「通常文頭におかれ」るのは主語であって主語と述語の「両者」ではない。会話文では主語、述語動詞の省略も可能だと承知するが、著者の認識は異なるようである。

英語は史的变化の過程で種々の屈折形式を失った。試論に「(性)」とあるのは、性 gender が文法要素とならない点で英語が例外だからであろう。だとすれば、三人称単数の場合を除き、英語の一般動詞が「主語の人称や数」によっては語形変化しない事実をどう見るのか。「厳密なまでに緊密で」と誇張された表現の陰に、英語固有の問題が隠される結果をまねいている。

日本で現場の会話を体験した外国人が最初にとまどうのは、主語の脱落にあるという。三言語の基本は、「誰が」と「どうする」にある。日本語にしても、とどのつまりはおなじことなのだが、文化の基本精神として「みんなが」「誰に」「どうする」ことを認めることが肝要であるから、往々にして主語を脱落させたいのが表現形態にあらわれる人情なのだ。(115-7)

日本語の「主語の脱落」については後に触れる。私見では、主語無表示に

よる戸惑いは(文脈抜きの)文章を読む時にこそ生じ、「現場の会話」ではかえって稀だと思うが、どうだろうか。

日本語でも基本は「誰が」「どうする」で、「文化の基本精神」に則った「人情」ゆえに「往々にして主語を脱落させたいくなる」という主張が事実だとすると、言語が文化を規定するどころか、文化が言語の重要な機能に介入し、ねじ曲げたことになる。中国語や韓国語も主語表示を必須としない。その文化についても著者は同様の主張を下すだろうか。証明されていない事柄を *a priori* に措定するのは、自らの方法を「帰納的なアプローチ」(112-32)と規定したことに反する。

言語の根幹をなす機能が「人情」によって左右されるとは空想に属する。日本文化の「基本精神」、即ち『みんなが』『誰に』『どうする』ことを認めることが肝要」は、「みんなから、誰(何)が、どうすることを、認めてもらう(られる)ことが肝要」と推測するが、そうした「基本精神」を有する日本文化とはどの時代のものだろうか。主語無表示は日本語の最初期に既に認められるから、必ず歴史以前のことに違いない。著者にはこれを立証する用意があるだろうか。

これは一種の婉曲的な意志表現の方法を兼ねてはいないだろうか？少なくとも、言葉の発信人にだけでなく受信人にさえ無意識的に安堵感を誘っているように思われる。(115-12)

仮想の前提に基づいた実証なしの感想だから論評しない。「安堵感」といった用語は言語分析とは無縁である。

4

次の二パラグラフでは、言語の主語表示と文化との関係が論じられる。

①“I love you.”“Ich liebe dich.”“Je t’aime.”はどうして「愛してる。」であって、「ぼくはきみを愛している。」^{<ママ>}のではないか。②あたかも、日本語は「ぼく」と「きみ」を明示することを嫌っているかのようだ。③上記の文意で「愛してる。」となれば、「ぼく」と「きみ」が重要なファクターであることは自明の理である。④なのに、表現する言葉がないというのであれば、これはもう文化そのものが人称代名詞を拒絶しているとしたか考えられない。(115-20)

①と②との続き具合が分かりづらい。また、譬喩とはいえ、「嫌っている」

は不用意である⁸⁾。③は「自明の理」を導く論理が見えず、文意が取りがたい。色々と paraphrase してみたが、納得できる結果が得られなかった。「ぼく」「きみ」を用いても日本語では支障がないから、ある歌手が「幸せだなー。ほかー（僕は）君という時が一番幸せなんだ。」と、主語無表示と表示の文を連ねて歌っても、文法におかしな日本語だと批判されることはない。

いみじくも試論が記すように、『『ぼく』と『きみ』が重要なファクターであることは自明の理』だからこそ、特に念を入れる場合を除き、日本語では文の要素とする必要がない（即ち、「脱落」ではない）。英語などでは、「自明の理」である「ぼく」「きみ」でさえ文法上の規則に従って（従わなければ非文となり、自己の意思が相手へ伝わらないから）、原則として要素としなければならない。

文意不通の③を前提に④が続く。人物呼称（所謂「人称代名詞」）の明示を②「嫌っている」が、④「表現する言葉がない」へ飛躍し、さらに「文化そのものが人称代名詞を拒絶している」と極論へ至る。

日本文化が「人称代名詞」を拒絶するという著者の「考え」は、実は、著者自身によって裏切られる。続くパラグラフ（116-4）で、英語などには一人称代名詞が1語しかないのに、往々にして主語を「脱落」させたがる日本語に多彩な呼称が存在することを述べ、次のように結んでいる。

これはもう、メンタリティーもふくめて文化の相違としか言いようがない。（116-20）

隣接するパラグラフ間で、一方では日本文化が「人称代名詞を拒絶している」と言い、一方では日本語で人間関係により種々の一人称呼称が用いられることを文化の問題だと言う。明白な自家撞着である。論は日本文学へも及ぶ（115-20～26）が、論評すべき内容がないから割愛する。

三言語に関して言えば、“I”にしても“Ich”、“Je”にしても、これこ

8) 試論には擬人的、感情的、俗語的表現を好む傾向が著しい。

跳梁跋扈（114-18）、脱落させたい（115-11）、拒絶している（115-20）、忌み嫌う（115-21）、愚（115-23）、「J'aime」とか（115-28）、時代をワープした（116-9）、鼻白む思い（117-15）、不気味（117-419）、御法度（117-23）、おそろしい（118-18）、嫌う（119-21）、始末が悪い（120-13）、ひきずって（122-17）、本家（122-25）、言ったって（124-9）

試論は日本語と日本文化の情緒性を否定的に述べるが、そうであればなおのこと、この種の表現は避けることが望ましい。

そが重要なメッセージであり、「愛する」という行為を表現するためには“J'aime”とか主語とセットでしか表現できない文法構造になっている。つまり、彼らにとっては「愛している」という暗示的な表現で相手に気持ちを伝えることが問題なのではなく、まさに「(この)おれが」、「(目のまえの)お前を」好きなんだ、で、「君はどうなんだ」という具体的な意志表示⁹⁾が重要である。(115-26)

「重要なメッセージ」だから「主語とセットでしか表現できない文法構造」をとるのか、「主語とセットでしか表現できない文法構造」だから「重要なメッセージ」だと解釈できるのか、どうとでも言える。このような時には判断を留保する慎重な態度が望まれる。「愛している」が「暗示的な表現」というのは如何かと思われるし、ロビン・ギル氏はその著書¹⁰⁾の第一章1「Iこそは謙虚の美意識」で、“I”は「そこにいながらない便宜上の存在にすぎない。自分を指しているなどの感じはない」(18p)ことを証言している。ロビン氏も言うように、この種の論法では“*It rains.*”の“*it*”の説明に窮するはめになる。

簡単に言えば、かれらは「スル」文化であり、日本人は「ナル」文化だと言ってもいい。今は「結婚スル」があたりまえだが、昔は「一緒ニナル」¹⁾、いやいや、もっと昔は「一緒ニサセラレル」²⁾のが普通であった。

(115-32)

人称代名詞の問題を「簡単に」「『ナル』文化」と結びつけるのは好ましくない。「結婚スル」「一緒ニナル」は言語表現の問題かもしれないが、「一緒ニサセラレル」は風俗のことである。論証なしに「普通であった」というのも些か無責任で、日本に限ったことではなかろう。

次のパラグラフ(116-4)については割愛する。ただ、一方で『わたし』というニュートラルな呼称(116-7)と言いながら、その直後に、

「わたし」から始まるすべての呼称には厳然とした階級観念、あるいは対人自己評価がくだされているのである。(116-15)

9) “I love you.”に「君はどうなんだ」という「具体的な意思表示」はありえない。
10) 注1に同じ。知人によればフランス人が“*Je t'aime.*”と言う時、“*je*”は囁くような無声音[ʒ]に聞こえ、“*tu*”も弱化して“*aime*”の部分だけが明瞭だという。ロビン氏の証言とともに、こうした説明の方が筆者には納得がいく。試論には具体的音声レベルではなく、文字表記のレベルで言語を論じる傾向がある。

とも言うのは自家撞着の一例である。

次のパラグラフ (116-21) も風俗論だから省く。ここでも、日本社会に変化の兆しが認められると言いながら、

自由を追求する社会に平等などあろうはずもなく、一国の文化のアイデンティティーがそんなに簡単に転倒するわけもない。(116-30)

と結ぶのは奇妙である。二つ前のパラグラフでは、

最近では俵万智の出現以来、作歌の常識、内容まで覆されようとしているのを見るにつけ、言語も文化も変化していく感を強くする (115-25)

と変化に期待を寄せている。自家撞着のもう一つの例である。

5

次のパラグラフはある種の翻訳論である。

たとえば、英語で次のような台詞があったとしよう。

“He left the church.”

「彼は教会から出た。」でいいわけだが、「彼は教会をあとにした。」の方が場面の情感が溢れているとか、登場人物によっては、「彼 (盗人) は教会から姿をくらました。」とかになったりする。これなどは単に表現スタイルの違いであって、それぞれの行動自体に違いはない。もう少し複雑な例をフランス語であげれば、

“Elle s’est fait coiffer les cheveux.”

この翻訳にあたっては、登場人物のステイタスに注意する必要がある。「彼女は髪をセットさせた。」(使役表現)になるのか、「彼女は髪をセットしてもらった。」(感謝ないし受け身表現)になるのかを決めなければならぬ。(117-1)

まず、英語の文例(「台詞」の意味は不明)が何を論証しようとしたものが分からない。それに対応するという三つの日本語文が「単に表現スタイルの違い」と言う言語感覚は問題で、「盗人が教会から出た。」と「盗人が教会から姿をくらました。」とは同意ではない。それぞれの日本語文に的確に対応する英語がないのか逆に尋ねたい。「姿をくらました」と述べたい時に、「出た」としか言えないのだろうか。

フランス語の文例に関しては、「使役」と「感謝ないし受け身」という対蹠的な文法機能が決定しがたいとは不審だが、後に検討する。

これに続く三パラグラフへの論評は割愛する。119頁5行に「閑話休題」とあるように、試論の本旨から逸脱した「閑話」と見なすからである。もっとも、「閑話」であるにしても内容・表現に問題が多いことは指摘しておく。

日本語は人間関係の感情ネットワークのなかで窒息寸前に発せられる言語 (118-23)

といった曖昧表現では読者に何も伝わらないし、

日本人は責任を転嫁しやすい文化をもっており、欧米人は責任をとらなければならない文化をもっている。(119-3)

とかつて流行した「日本語(=日本文化)劣等論」的決め付けも問題である。文章に不整表現が多いこともあって、読み通すのに困難を覚えた。

6

前述のように、最後のパラグラフの内容は、前の記事と「閑話」で隔てられているために意味がとりにくい。

日本語が「髪をセットさせた。」とか、「髪をセットしてもらった。」

とか、対人関係をにじませた表現区別を必要とするのに対し、三言語が一つの文ですませられるのは、不思議と言えば不思議である——ちなみに、英語では“*She had her hair set.*”ドイツ語では“*Sie ließ sich das Haar frisieren.*”と表現できる——。(119-5)

フランス語の“*Elle s'est fait coiffer les cheveux.*”が、「登場人物のステイタス」によって、日本語の「彼女は髪をセットさせた。」という「使役表現」にも、また「彼女は髪をセットしてもらった。」という「感謝ないし受け身表現」にもなると言うが、筆者には疑問が拭えない。既述のように、使役と受身とは対蹠的な機能だからである。

「彼女は髪をセットさせた。」と「彼女は髪をセットしてもらった。」とはともに自然な日本語文だが、使役、受身と呼ぶには問題がある。前者には使役の対象(誰に)が欠け、後者は動作主(誰から)を欠く。適格であるためには、文脈で対象や動作主が明らかなことを要する。受身は「セットされた」だから、後者は受益表現と呼ぶべきで、ここに問題解決の鍵がある。

英訳文が典型的な使役構文でないように、例示された外国語文の文脈抜きでの文意は「セットしてもらった」と受益表現に解すべく、使役「セットさせた」に訳す場合とは、動作(セットする)の為手が受手(彼女)に対して

従属的立場にある時に限られる¹¹⁾。「登場人物のステイタスに注意する必要」(117-9)とはそうした場面を指すと思われる。誰かを使役することが、結果として動作の受手の利益となり、つまり受益表現と同じだからである。

かつての日本語では、妻や使用人から受益行為があっても、それを「支度させた、用意させた」と使役表現で表すことがあった。受益は当然のこと、感謝する謂われはないというのが当時の常識だからである。今日でも、会社の上司は部下に対して「仕事をしてもらおう」のではなく「仕事をさせる」立場だが、私的な場面では「(何かを)してもらおう」ことがあろう。要は、受益=感謝の意識を持つか否かによる。同一の人間関係であっても「させる」と「もらう」が共存しうるのは、話者の意識に応じて情意を表出するために日本語が自ずから発達させた機能であり、「一つの文ですませられる」(119-7)外国語ではそれがなかったのである。著者はフランス語の諸用例を収集して帰納的に分析し、どのような「登場人物のステイタス」の相違があった時に日本語訳として反映させるべきかを実証的に指摘すべきであった。そうした用意なしに次のように述べても納得は得られない。

このように、言語はわずかひとつの短文を比較してみただけでも文化理解へとつながる材料を提供してくれるのであり、言語と文化の関係を複数の言語、複数の文化にまたがって比較することは奥行き深い研究テーマとなるであろう。(119-9)

どのような「文化理解へとつながる材料」が得られたのか。該当すると思われるのは、

日本語が(略)対人関係をにじませた表現区別を必要とするのに対し、三言語が一つの文ですませられる(119-5)

という言葉足らずの記述である。また、「言語と文化の関係を複数の言語、複数の文化にまたがって比較すること」を「研究テーマ」と呼ぶには、余りにも漠然としている。

11) 知人の教示によれば、「無理に」という状況が文脈にある場合も同じ。フランス語では「父に本を読んでもらった。」と「父に(無理を言って)本を読ませた。」とが同一の文で表現可能だという。

第Ⅱ部

ここでは「Ⅱ.『気』とは何か」の前半(119-14~121-29)を論評する。後半(121-31~124-17)は辞書等の引用記事で占められるからである。

1

試論に先行する「気」論考の存在を知る読者がここで期待するのは、それらの的確な要約・紹介・批判的検討だが、

具体的な分析対象を「気」の表現にしぼり、本プロジェクトで構想する「言語文化学」的視点からその問題点を明らかにする。(113-10)

という記述が中心である。構想段階の「言語文化学」に既に独自の「視点」があるらしく、次のように説明される。

われわれは日・英・独・仏の表現比較を行うことによって、それらの文化的特徴——とりわけ日本社会における情緒的集団意識の表現スタイルや、欧米社会における理知的個人意識の表現スタイル——が言語表現のなかに浮き彫りにされてくるのではないかと考える。こうした作業は外国語表現のメカニズムや外国文化についてのより一層深い理解をもたらしてくれるだろうが、それ以上に、日本語や日本文化にひそむ心性を理解させてくれることだろう。(119-19)

第Ⅰ部で指摘したように、「日本社会における情緒的集団意識の表現スタイル」や「欧米社会における理知的個人意識の表現スタイル」が議論の余地ない自明の事実かのようなのである。本来、「日本語や日本文化にひそむ心性」を言語に即して一つひとつ明らかにして、初めてこの種の発言が許されるのではないか。こうした前提で倒錯した議論を行えば、結局はこじつけに陥る他はなく、事実、次にそれが露呈している。

「気」表現に関しては、表現内容を明確に限定したり、考えや思いをストレートに主張したりすることを嫌う日本文化の影響を見ることができる。「どうも行く気になれない。」などは日本人の典型的な意志表示であるが、これなどは三言語に翻訳しようとすれば、主文としては「わたしは行きたくない。」としか訳せないものである。日本語では、いわば、「わたしを行きたくなくさせている状況」に主眼が置かれているようであり、曖昧というか婉曲というか表現から角がとれているが、欧文では「わたし」の「行きたくない」意志を明確に表現しなくては文として成立しない。いや、表現そのものは可能だとして、行けない理由をあなた

まかせにでもすれば、「こいつは主体性のない奴だ」と思われかねない。

(119-25)

「訳せない」「文として成立しない」と言いながら、次に「いや、表現そのものは可能だとして」とそれを翻し、言語事実から離れて「主体性のない奴」に対する社会的評価へと論点が移される。言語から離れた立論は「言語文化学」の名に背くものである。

日本語では話者の心情に応じて「行くつもりがない、行きたくない、行く気がしない、行く気になれない」など細やかな表現があるのに、例えばフランス語では不本意にも「意志を明確に表現しなければ文として成立しない」から、「行きたくない」と言う他ないのだろうか。日本語の「行く気になれない」に相当する話者の心情は、日本語と同形式でとは限らないが、表現可能なのではないか。「主文としては」(119-29)と、言語構造の異なる外国語と日本語とが一對一で対応することを前提とした議論は不毛である。

ともあれ、こうした論理の飛躍を許すのは、「表現内容を明確に限定したり、考えや思いをストレートに主張したりすることを嫌う日本文化」(119-21)、「欧文では(略)意志を明確に表現しなくては文として成立しない」(119-32)という不適切な前提の存在である。

日本語の側から言えば、著者は副詞「どうも」にも注目すべきであった。例えば類似する意志表示として

- ①行かない。 ②行くつもりがない。 ③行きたくない。
④行く気がしない。 ⑤行く気にならない。 ⑥行く気になれない。

という文があって、これらと副詞「どうも」「ぜんぜん(全然)」「ぜったい(絶対)」との共起関係を考えてみると、私見では次のようになる。なお、○は使用可能、△は場合により使用可能、×は使用不可の意である。

	①	②	③	④	⑤	⑥
どうも	×	×	△	○	○	○
ぜんぜん	×	○	○	○	○	△
ぜったい	○	○	○	△	△	×

粗雑な分析だからきれいな相補的分布を描けませんが、それでも副詞「どうも」が単に程度の低いことだけでなく、話者の主観的な心情を直接的に表す副詞であることが見て取れよう。著者の選んだ「どうも行く気になれない。」は決して「典型的な意志表示」ではなく、文法的に特殊な性格の(日本語特

有の性質をもつ)文なのである。

2

次の二パラグラフ(120-4~121-13)には、「記号論」「記号」といった用語を使用した概論風の記述がある。常識的内容だから試論がどのような読者を想定しているのか疑われ、内容にも問題が多い。一例を挙げよう。

「ハナ」とあれば「花」か「鼻」か「華」か「端」か「湊」かであるが——日本語は同形異義語が(homonymy)が多いので始末がわるい¹²⁾——、(略)音声形態で発信された「ハナ」も当然発話のコンテクストのなかで、「花」とか「鼻」などの何物かに限定されているわけだ。

(120-12)

「花」か「華」かを限定するコンテクストは考えがたい。「音声形態で発信された『ハナ』」の内、「花」と「鼻」とはコンテクストの助けを借りずとも、多くの方言で(東京方言や京都方言で、恐らく著者の方言でも)アクセントによって区別される(前者が有核型、後者が無核(高起)型¹³⁾)。言語の具体的存在である「音声形態」に著者の関心が薄いことは、表記の問題である「花/華」の混入に象徴されるように、読む者に明らかである¹⁴⁾。なお、中略したのは次で、筆者にはどのような譬喩かまったく分からない。

ちょうど偶然絵画か何かのなかでみかけた「緑」と信号の「緑」との記号的役割がコードの性格によって能記段階から異なるように(120-14)次の部分も理解できない。

言語としての「気」について記号論的にながめてみると、音声形態をとってみても書記形態をとってみても、「気」は一語のみで記号内容を特定しない言葉であるといえよう。すなわち、「空気」「勇氣」「本気」のように、「気」がほかの漢字と合成してなにものかを記号表記することはできても、「気」だけがなにを示すかは曖昧なのである。(120-20)

12) 一般には「同音異義語」と言う。「同形」は「同形態」の意味か。「始末が悪い」については注8参照。あるフランス人学生は同じ事実を「非常に面白い」と筆者に語った。

13) 東京方言では「花・華」はハナ(ガ)、「鼻・湊」はハナ(ガ)、「端」はハナ(カ)と区別される。

14) 注10参照。

「記号論的にながめてみる」とは何か。「氣」の「音声形態」及び「書記形態」とはそれぞれ何を指すのか。著者は「形態」を見るだけで「一語のみで記号内容を特定しない言葉」だと判定できるのか。「合成」とはどのような語構成のことか。「記号表記する」とは何か。「能記」即ち「記号表現 signifiant」(120-6)と「記号表記」とは同じか。疑問は際限がない。

中国起源の正統な漢語「勇氣」と、和語的な「本の氣」が縮約された「本氣」、英語 air の訳語として明治時代に新造された「空氣」とを並置して、「氣」の意味が曖昧だと言うのは問題設定の誤りである。

では、本当に「氣」は一語だけで意味を特定できない語だろうか。「氣を確かにしろ。」「氣が小さい奴だな。」「氣を大きく持てよ。」などと言う時の「氣」の意味が特定できないとすれば、意義記述を行う側に問題があるのではないか。「氣がすすまない」の

「氣」自体が具体的に何をさすかは依然として不明である。(120-29) と言うが、誰しも「氣持ち」や「気分」と答えるに違いない。問題はこれらの抽象名詞の意味も捉えがたい点にあるが、それは別の問題である。所が、「食がすすまない」では、

「食」が「食事」であれ「食欲」であれ、「すすまない」と個別的にまた合成的に意味形成したことは容易に理解できるが、「氣がすすまない」ではそうはいかない。(120-30)

と、「食事」「食欲」の意味が「容易に理解できる」と言う。それはどのような手続きで抽出されたものなのか。私見によれば、「食欲」の意は「食がすすまない」全体を「食欲がない」と解して始めて認められるものである。従って、「個別的にまた合成的に意味形成した」も理解できない。

「心」に関して特異な知識が示されている。

「心」が似ていると言えるが、これはもともと内臓の通称であったものが精神の意に転化し、「体」と対比される総称となったほか、「心臓」といった明確な意味をもっている(121-6)

遺憾なことに、これは『広辞苑』の語源説と語釈とが改変されたものである。

こころ [心] (心臓などの臓腑のすがたを見て、コル(凝)またはココルといったのが語源か。転じて、人間の内臓の通称となり、更に精神の意味に進んだ) (略) ③①心臓。胸。むなさき。浄、

世継曾我「—まで来る憂き世」

『広辞苑』の語源説は旧編者新村出氏の説だから、それを改変して(転じて、人間の内臓の通称となり → もともと内臓の通称であったものが)、自説のように記すのは慎むべきである。付加された「『体』と対比される総称となったほか」の根拠は不明。『広辞苑』は「心臓」に限定せず、『世継曾我』の文例に「心臓」という「明確な意味」はない。

これ(121-14)以下は、「空気、勇氣、本気」を「漢字合成単語」と呼んだり、「空色、勇者、本棚」を「合成単語」と称するなど、日本語研究の常識とは無縁の用語による記述と、辞書等の冗長な引用で占められる。その結果、

「気」の一語で具体的に何が意味されるのかいまだに不分明である。

(124-7)

に終わり、「問題点を明らかに」(119-12)した箇所はないから論評しない。

第Ⅲ部

ここでは試論の「Ⅲ.『気』の複合述語表現と外国語」の方法上の問題点に絞って論評する。

1

最初に指摘するのは、「記述的分析」の作業単位として、慣用句ではなく、寺村秀夫氏の「複合述語」が選ばれたことへの疑問である。

寺村氏の『日本語のシンタクスと意味 I』(くろしお出版1982)によれば、それは「文の構成要素としての『補語+述語』の型として類型化」(192p)する試みの中で設けられた構文論的概念であり、

「名詞+格助詞+用言」が一体化し、その中の格助詞がもはや格を表わさず、それが全体として一つの動作、でき事、状態、性質などを表わす述語の中に埋没してしまっているもの(189p)

と説明されている。この名詞は概ね「身体部分(気、性質なども含む)」に限られる。重要なのは、「その中の格助詞がもはや格を表わさず」ともっばら文法的な性質によって設定されたという点である。複合述語は所謂「慣用句」と重なるが、寺村氏は格助詞が実質的に機能しているか否かによって区別しようとする。つまり、ここでは構成要素たる名詞の意味記述のために複合述語という作業単位が有効かどうかはまったく考慮されていないのであ

る。同時に、寺村氏の「複合述語」例を見ると、修飾成分（「補語」の内）は想定されず、総て「述語」位置に立つ文例ばかりである。

所が、試論の語例には「複合述語」とは思われないものがある。例えば、「4 気が大きくなる、9 気が気でない」は「名詞+格助詞+用言」の規定に違反する。寺村氏が「複合述語」認定のために設けた四つのテストに、残る35語例が総て合格するかどうかも確認されていない。

そもそも、一体化した「複合述語」によって「気」の意味を探ろうとするのは、「水」の化学的組成を $[H_2O]$ だと知った人が、「水」を観察して水素 $[H]$ の本質を得ようとするのに等しい。「複合述語」は単なる単語連続ではなく、化学反応に相当する「熟合」を経て一語相当と化している。第I部で単語「嘘」に含まれない「だます意図をもって」の付加的意味が、「嘘をつく」という「複合述語」で生じることを指摘したように、構成要素の意味の総和と「複合述語」の意味とは必ずしも等しくない。「気」を含む「複合述語」をいかに精細に分析しても、「気」の意味領域の精確な認定は原理的に保証されていないのである。

次に、外国語へ翻訳することによって日本語の意味領域を探るという方法に疑問を覚える。

一つの【思考実験】を試みる。いま、英語を母語とする人物に、意味不明の日本語「頭、手」の意味記述を課すとする。彼はその用法から意味領域を明らかにしようと考え、次のような「複合述語」の例文を見出す。

【頭】頭が切れる。頭が下がる。頭が低い。頭が古い。頭が良い。頭に入れる。頭に浮かぶ。頭に来る。頭に据える。頭を抱える。etc.

【手】手が込む。手が出ない。手が早い。手に余る。手に入れる。手に負えない。手に掛ける。手を下す。手を出す。手を通す。手を引く。etc.

これらの「複合述語」の意味を辞書で調べ、

例：頭が下がる＝敬服する。感心させられる。

頭が古い＝考え方が古く、今の時代に合わない。

頭に来る＝①気が変になる。②かっとなる。

頭を抱える＝よい考えが浮かばず、考え込む。（『広辞苑』による）に沿って正確に英訳し、日本語「頭」に該当する英語の部分をもとめて考察を加える。さて、彼はめでたく「頭＝head・手＝hand」の結論に至るだろ

うか。それとも、例えば「頭」を「様々な精神、心理状態や人柄を表すが、厳密な意味は不明」と報告するだろうか。

次のような問題もある。上掲の慣用句を見ても、その熟合の度合いは必ずしも一様ではない。構成要素の意味を探るためには、実は、熟合度が低いほど要素たる単語本来の意味が残るから有利であり、熟合度の高い「複合熟語」ほど本来の意味が失われるから不利だと考えられる。「気」の意味領域を探るために「複合述語」を分析するという方法の採用は、基本的な部分で錯誤を犯しているのではないか。

2

「記述的分析」という自己規定に反して、日本語及び三外国語への「記述的」配慮が欠けていることも問題である。

日本語に限って見る。「気が合う」以下の「複合述語」37例(例文は41)が分析対象だが、例えば『広辞苑』には80例以上もの「気」を含む慣用表現が載っている。漏れたものの中には、私見によれば、日常的に用いられるもの(気が軽い、気が急ぐ、気が早い、気が向く、気を引く)や、いかにも日本語的な言い回し(気が差す、気が通る、気が詰まる、気を吞まれる、気を吐く、気を張る)がある。少なくとも、「気がする」を採って「気にする、気になる」を棄てる合理的理由は見出せない。著者はこの種の批判を予想して、

網羅的ではないが、日常の会話において使用頻度が高いと考えられる一般的な表現を慎重に選択し、特に、日本人にとっては、その意味を容易に理解できても、日本語を学ぶ外国人にとってはわかりにくいと思われる表現はなるべく扱うことにする。このようにして厳選された日本語の使用例を(下略) (125-4)

と断るが俄には信じがたい。「記述的分析」の作業仮説を

ある言語表現の意味概念はその使用のされ方を詳しく吟味することによって明らかにすることができる(124-24)

と立てるならば、「外国人にとってはわかりにくい」基準は不要だし、「使用頻度」や「一般的な表現」の判定根拠を示さなくては「慎重に選択」「厳選された」の客観的妥当性がない。「記述的」が必ずしも「網羅的」でないせよ、こうした選択を恣意的と批判するには十分な理由がある。なお、「使用

頻度が高い」「一般的な表現」とは熟合語の高い表現に他ならず、前記した方法上の問題がいっそう深刻である。

さらに、「使用のされ方を詳しく吟味する」としながら、日本語例文は典拠不明の文（作例か）がただ一つで、それも「詳しく吟味」された形跡がほとんどない。例えば、例文4、29は会話文だろうか（他は原則として会話体）。具体的例文に置いたために、かえって「複合述語」の意味が変質した例もある。例えば、「気が（の）利く」の例文を

8.a. 誰が電話してきたか確かめるなんて、子供ながらに¹⁵⁾気の利く子だ。(132)

としたために、フランス語訳では子供に限定された表現となっている。「気が強い」の例文18「彼も気が強いねえ。」は、「あの女性は～」だったとしても同じだろうか。これらの訳例は「気が（の）利く、気が強い」の一特殊事例について有効であるにすぎない。

付言すれば、分析対象の選択に際して、「気が重い、気が大きい」を選んだから「気が軽い、気が小さい」は省いたという釈明は成り立たない。「重い／軽い、大きい／小さい」と同様に、外国語でも反意語（対義語）で応じるかどうか自明ではないからである。日本語でも、分析対象となった「複合述語」について、次のような反意語によるペアを作ることにはできない（慣用句としては存在しない）。

気が多い／*気が少ない	気が散る／*気が集まる
気が遠くなる／*気が近くなる	気が晴れる／*気が曇る
気を入れる／*気を出す	気を失う／*気を拾う

こうした言語事実が「詳しく吟味」されているとは言えない。

外国語として学ぶ日本語教育への寄与も視野に入れている（125-1）ともあるが、『『気が多い』とは言うのに、『気が少ない』とはなぜ言えない？』の質問にどう答えるべきかを教えない。

また、「複合述語」を「あいうえお順」（125-8）に並べ、順を追って述べる構成は、意義分析の記述として工夫が足りないと思う。

慣用句研究には早く宮地裕編『慣用句の意味と用法』（明治書院1982）という専書がある。試論と関係する「気が気でない、気がする、気がつく、気

15) 「子供ながらに」は「子供ながら」の誤り。現代語としては些か古く、「子供にしては」「子供なのに」とすべきか。

に入る、気にする、気になる(一)、気になる(二)、気をつかう、気をつける」など、多くの慣用句の「例解」があり、それぞれに「文例・意味・文法・類義語句・参考(英語・中国語・フランス語・韓国語・タイ語の対訳例あり)」が備わる。「解説」は簡潔な慣用句概説となっており、そこでは慣用句の中で使われるのがもっぱらである「気」について、構成から

(1)気+ガ+自動詞/形容詞 (例)気がつく、気が立つ、気が強い

(2)気+ニ+(自他)動詞 (例)気にかける、気にする、気になる

(3)気+ヲ+(修飾語)+他動詞 (例)気をくばる、気をよくする

に三大別し、(1)の「気」は「その人に備わった心の傾向・気質・心理・心の動き・意志などを表」し、(2)(3)は「意識や注意力を表す」と概略の意味を提示して、現代中国語「心」と比べている(248~249p)。また、「常用慣用句一覧」は学習用国語辞典五種から選定した基本慣用句表に基づく一覧表である。試論がこの優れた先行研究を参看しなかったことは惜しまれる。

外国語訳についての論評は控えるが、例えば「気が付く」の日本語例文17.a.「自分の過ちにはなかなか気が付かないものだ。」の記事を見ると、

【独】例文の目的語が「過ち」であるから、“zugeben”を用いたが、認識、知覚にかかわる「気が付く」は、ほかに、“erkennen”, “bemerken”, “wahrnehmen”, “auf *et.* aufmerksam werden” などさまざまな対応表現がある。

【仏】「認識する」の意では他に、“constater ; se rendre compte de” などがある。(140-4)

とあるだけで、ドイツ語、フランス語における類義表現間の相違に触れないから、「詳しく吟味」した考察の結果となっていない。目的語が「過ち」なら“zugeben”だとすると、「幸せ」あるいは「癖」なら何が対応するのか、「さまざまな対応表現がある」では分からない。「他に、～などがある」と記されても、それらのフランス語が相互にどう違うのかを知ることができない。

また、例文27「気に病む」のフランス語訳を

「気をもむ、心配する」の意。(147-19)

と説明するが、疑惑・心労などマイナスの事態を「あれこれ考え込む」ことしか表せない「気に病む」と、嬉しい事態かどうか分からないまま「結果(の

報せ)を待ちかねる」気持ちを表す「気をもむ」とが同意だろうか。

3

最後に、分析結果の考察を示すはずの、

3.3. 「気」表現とそれに対応する外国語(英語、ドイツ語、フランス語)の特徴

について簡単に触れておく。

本稿で示した「気」の表現の記述分析も、(略)英語、ドイツ語、フランス語を総合的に捉え、かつ日常的で平易な表現の中にその対応関係を見いだそうと試みたものである。(154-22)

と記すものの、「気」に対応する三言語の単語を列挙して「～などが表す意味領域と重なり合うことが明らかとなった」(154-30)と言うだけで、例えば英語とドイツ語とを「総合的に」考察した記述は見出せない。最後近くの「気」表現に関しては、固定した語彙の意味を求めるより、文脈と相まって生じる派生的な意味を理解することに努めた方が「気」表現の本質的な理解につながり、日本人の精神のあり方を知る上でも効果的であろう。(155-28)

は、ほとんど試論全体の自己否定である。いろいろと外国語と較べてみたが、改めて「気」表現は日本語独自の幅広い使用域をもつものである

(155-10)

の再確認に終わったことを自認するのだろうか。「固定した語彙の意味」が内包的(中核的)意味のことだとすれば、日本語「気」を本質的に理解するためには、内包的意味を追究するよりも「派生的意味」即ち外延的意味の理解に努めるべきだと言うのでは意義記述の放棄である。そうした方法で「日本人の精神のあり方」を考えれば、「曖昧な表現を好む日本人(=日本文化)」という不適切な前提に頼る他はない。

では、種々の派生的意味を検討した著者の「本質的な理解」はどこに示されているのか。

複合述語における「気」は、単独では、「意識に現れる精神のあり方やその傾向」といったプロトタイプ的な意味しか抽出できず、具体的な指示内容は、その連語する語句及びそれぞれの表現が用いられる文脈で具現される。(154-3)

がそれかと思われるが、要するに「分からなかった」の婉曲表現である。とりわけ、外国語と比べたことの意義がまったく現れていない。

こうした結果にもかかわらず、「Ⅳ おわりに」に示された自己評価は次の通りである。

「気」ということばのもつ意味領域が具体的に提示されただけでなく、日本語と欧米語の表現構造の違いを通して、日本文化と欧米文化の違いを垣間見ることができたと思う。(156-16)

明敏な読者は知らず、筆者には「気」の意味領域が「具体的に提示された」箇所、及び日本語と欧米語との「表現構造」の違いを指摘した記述を見出すことが出来ない。先入見とも言える不適切な前提を繰り返す以外に、どのような日本文化と欧米文化との相違が「垣間見」えたのだろうか。論を成す以上、「透けてみえる」(113-7)や「垣間見る」では不十分で、たとえ些細な事柄であったとしても、公然と摘示しうるだけの結論が必要である。

【おわりに】

日本語にはフトカ(太い)一語で「大(背高)・太・長」を表し、コマカ(細かい)一語で「小(背低)・細・幼」を意味する方言がある。所が、同じ方言は共通語が区別しないアスペクト(フッテイル)を進行態(フリョル)と既然態(フッチョル)に区別するだけでなく、未発の将然態とも言うべき「フリョッタ」(降りかけたが、本格的には降らなかった)を有してもいる。粗と精とが共存するこの事実を、しかしながら、我々は文化的相違の直接の反映だとは解しない。日本語と外国語とを比べる場合も同様で、言語を文化と結びつける立論には慎重の上にも慎重な態度が望まれる。

本稿は、「言語文化学」の記念すべき最初の業績として纏められたはずの試論を読み進むうちに筆者が抱いた数々の疑問に基づく。読み返すと、否定的表現の多用が気になる。やむを得ぬことと了承を乞いたい。

誤読や的外れの批判を避けるべく、複数の同僚・知人に草稿の閲読を願い、それぞれ有益な意見や助言を頂いた。ここで謝意を表する。

なお、本稿は試論の行文に表れたその内容を論評したものである。「間違いは間違い」(118-30)であることを率直に表明する文化に理解ある著者には余分だが、念のため書き添える。

〔付記〕

再校の段階で、山田敏弘「テモラウ受益文の働きかけ性をめぐって」(『阪大日本語研究』11、1999・3)を読む機会を得た。受身や使役との関連など、本稿で部分的に指摘した点を含みながらテモラウ受益文を総合的に考察したもので、筆者には有益であった。